南 一 弘の

街を行く

第112回 銀座 Ginza

東京なのか江戸なのか

こんな寂しい銀座を見たことが無いですね。

新型コロナウィルスの影響というのは十分理解していますが、あの頃のにぎわいとのギャップに驚かされます。これほどまでに中国など訪日観光客で占めてられていたとは！ 閑散ぶりを眼前でまざまざと見せつけられ、何か怖いものを感じるほどです。

日本人も外出（買い物や食事も）を控えているためではありますが、何にせよひど過ぎる光景です。この際、観光立国のあり方とそのリスクを真剣に見直す必要があるでしょう。

かつて中央通りは、沢山の観光バスがずらりと並び、広い歩道が滞るほど中国人観光客であふれていました。飲食物販の店舗は中国語のわかる従業員を大量に雇い、店内は中国語のポスターやチラシでいっぱいでしたね。正直、小生には大きな声やがなり立てる（ように聞こえる）会話が苦手で、銀座界隈の店を覗くことに気が引けていました。でも、日本の消費経済を支えてくれていたのは彼等です。各店舗も訪日旅行者の強い購買力が無ければ成り立ちません。長らく不景気が続いた日本には、本当に有り難いことなのですが…。

今回のコロナの影響で注目すべきは、訪日旅行者の消失ではなく、「日本人の銀座離れ」の進行です。カッコいい大人、背伸びした若者の足が遠のき、旧き良き銀座文化が消滅しています。銀座は今、東京ではなく“江戸の街”になってしまったのかもしれません。

日本橋から京橋、銀座へつながる成熟した文化が香るラインが浅草から上野へのラインの延長に過ぎなくなったということです。小生にとって銀座は別格で、やはり東京を代表する文化発祥地です。でも若者に言わせると「何を言っているの?」と、鼻で笑われるでしょう。小生の若かりし頃は銀座へは服を着替えて行きました。社会人になっても一張羅のスーツで出かけたものです。でも今は、成熟した人の集まる所は銀座に限りませんし、むしろ銀座以外のそうした場所を訪ねる時の方がワクワクします。ともすれば銀座はお年寄りが懐古気分で散策する所となったのかも知れません。何かを発見するスリルがないというか。そう、街に人を引きつける二大要素は「わくわく感」と「スリル感」です。これが無ければ街は風化していきます。街って生き物ですから、過去になってしまったら歴史しか残りませんよ。過去の遺物を売りにした日本中によくある観光地となるだけです。

閑散とした銀座。若者や大人をワクワクさせる洗練・成熟した街から、国際観光地に変貌

南 一弘

1982年大学卒業後、三井不動産販売に入社。ローンスター・ジャパン・アクイジションズを経て、2001年エートス・ジャパン・エルエルシーを設立。同代表に就任。2005年4月MID都市開発（旧松下興産）の代表取締役に就任。2006年ジャパン・アセット・アドバイザーズを設立。同代表取締役に就任。